

今月の PICK UP

『ルールの世界史』 伊藤 毅／著 日経BP、日本経済新聞出版本部 322.1

私たちはたくさんのルールに囲まれて生活しています。憲法といった国の法律をはじめ、学生であれば校則、社会で働く身であれば社則やマニュアル、家庭によってはその家独自の決まりがあることもあります。

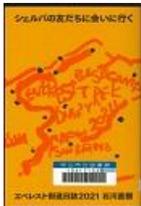
そんな様々なルールがあふれる現在ですが、そもそものルールの始まりはどのようなものか。また、ルールはどのように世界に広まり変遷していったのか。この本は、そんなルールの歴史を経済の視点から教えてくれます。こう書くと一見難しい本に感じるかもしれませんが、平易で分かりやすい表現で書かれており、サッカーの意外な起源を導入に語られるルールの歴史は、国ごとの特色も興味深く、すいすい読めてしまいます。学校で習った歴史や聞きかじった単語など点でしかなかった知識が、読み進めるうちに線がつながって理解でき、知的好奇心を大いに刺激されます。



司書の おすすめ

『シェルパの友だちに会いに行く』 石川 直樹／著 青土社 292.51

本書は、2021年コロナ禍で困窮する旧知のシェルパたちに支援金を届けるため、仲間と共にネパールを訪れた旅の記録です。旅の行程には登山も含まれていて、滑落や高山病といった危険に加え、コロナ禍でより困難も多い中での行動に著者とシェルパたちの絆の強さを感じます。現地の風景や食事、シェルパの仕事ぶりなど写真も豊富で、中でもシェルパたちの表情が印象的な1冊です。



『ミシンの見る夢』 ビアンカ・ピッツォルノ／著 中山 エツコ／訳 河出書房新社 973ピ

19世紀末、階級社会のイタリア。厳しい暗黙の掟の下、人生を自由に選べなかった時代。お針子（サルティーナ）と呼ばれる貧しい階級の女性たちは、上流家庭に通って針仕事を請け負い、そこで様々な秘密を見聞きました。本書はそんなお針子のひとりが主人公の物語。身寄りのない少女が手に職をつけ、読み書きを学び、たくましく聡明に生きる女性へと成長していく姿が描かれています。



『次の角を曲がったら話そう』 伊集院 光／監修 小学館 911.3ツ

本書は、伊集院光さんのラジオ番組コーナーに投稿された自由律俳句の傑作集です。自由律俳句とは、十七語の定型や季語にとらわれず自由に表現する俳句です。タイトルになっている「次の角を曲がったら話そう」という句に、みなさんはどんな状況を思い浮かべますか。

句の解説はラジオ番組らしく対談形式になっていて、軽妙なやり取りが俳句の良さをさらに引き立てています。ふと浮かんだ気持ちをどう表現するか、自分でも挑戦したくなります。



『名画のドレス』 内村 理奈／著 平凡社 383.1ウ

絵画を服飾の観点から見ると、当時の社会の様子がよくわかるようです。たとえば18世紀フランス貴族の肖像画に描かれたドレス生地は、その特徴からリヨンで手織りされたものとわかります。ルイ14世によって奨励された絹織物産業の発展がここに見られます。

「レース」「靴」など60のテーマごとに、絵画とエピソードが紹介されています。拡大された服飾の細部はとても芸術的で、つい見入ってしまいます。

